

Special Interview

納得のゆく治療を行うために

鍼灸学校に通いながら、助手をしていました。その時に、学校では学ぶ事ができなかった事を沢山、経験させて頂きました。あの時の経験がなければ、今の私はなかったと思います。本当に感謝しています。

その後、他院に勤務しましたが納得のいく治療ができず、その時の気持ちが開業のきっかけになりました。もう自分でやるしかない、と思い立って1ヵ月後に開いたのがこの鍼灸院です。卒業して2年目のことでした。不安がまったくなかったと言えば嘘になりますが、開業の事は、恥ずかしくて、私からは誰にも言えませんでした。今は友人、知人にも知れ渡り、応援してくれていると思います。

勤めの時も患者さんを任せ、みせて頂いていましたが、その時と開業してからとは、プレッシャーが全く違いました。患者さんの期待に応えられない自分の力のなさに、悔しくて毎晩、よく泣いていました。涙をこらえて電話し、先生方にアドバイスを受けました。本で調べても、実際に患者さんを治療するのとは違い、「わらをもすがる」とはこの事だと痛感しました。感謝、感謝です。

私は開業という道を選びましたが、開業する事が偉い事だとは決して思いません。先生になられる方、お勤めをされる方、色々だと思

います。でも、せっかく鍼灸師になれたのだから、ずっと鍼灸を好きでいたいと思います。



同性ならではの雰囲気づくり

ソフトテニスをやっていた学生時代に鍼灸院に通い、鍼の優れた効果を知ったのですが、やはり男性ではなく女性の先生に診てもらいたいという気持ちがありました。おそらく私と同じような思いの女性は少なくないだろうと考えてレディース鍼灸院にしたのです。婦人科疾患と言われる女性ならではの身体の悩みをお持ちの患者さんも多いですから、異性には話づらいということもあるでしょう。徹底した治療にはその人のメンタル面や生活スタイル、食生活にも踏み込んでいかなければなりません。そうした場合、同性の方がコミュニケーションをとりやすいのではないのでしょうか。なかなか打ち解けてくれない患者さんに対しては、無理に聞くのではなく、向こうから話しやすいような雰囲気を作るように心がけています。先日、患者さんにアンケートにご協力をお願いしたところ、リラックスできる、率直に話ができる、というアンサーが多々見受けられ、とてもうれしく思いました。治療を受けながら会話を楽しむことが、ストレスの発散になるとおっしゃる方もいらっしゃいます。



鍼灸学科(21期夜間部) 平成8年卒

竹田世理子先生

患者さんと一緒に努力すること

鍼灸の世界は奥が深いです。一生勉強という言葉がふさわしい。ですからいまでも、いろんな講習会を探して参加しています。古典的な診療方法、西洋医学を採り入れた診療方法などじつにさまざまな技に触れることができ、患者さんの容体をより詳しく認識できるようになりました。時間のかかる治療では患者さんが挫折しそうになることがあります。一緒にがんばって健康状態を改善していく喜びに勝るものはありません。学生さんや子供たちが、私も将来、鍼の先生になりたいと言ってくれたときは心からうれしく思いました。鍼灸師と患者さんという関係を越えて、気持ちを通わせることができた時に、努力が報われたと感じます。

